



今年、2014年は第一次世界大戦の勃発から100周年に当たる。そして現在の世界は、さながら20世紀の初頭を想起させるような大激動に見舞われている。あるいは、国際政治

## 歴史の文差点

明治大特任教授 山内昌之



と世界史の転換点として、2014年は後世に記憶される年になるかもしれない。それは「イスラム国」の出現のように、これまで国際関係で前提とされてきた大國間の平和

この新たなダイナミズムは、近代ヨーロッパ各国の外交と国際秩序観に大きな修正と転換を余儀なくさせた。すでに19世紀末になると、日本やアメリカといった非ヨーロッパ諸国がヨーロッパの大国と肩を並べながら

この新たなダイナミズムは、近代ヨーロッパ各国の外交と国際秩序観に大きな修正と転換を余儀なくさせた。すでに19世紀末になると、日本やアメリカといった非ヨーロッパ諸国がヨーロッパの大国と肩を並べながら

## 第一次大戦という病根

国際政治のゲームに参加するようになる。それでも、日本の関心は東アジアと西太平洋、アメリカの関心は西半球と太平洋に限られていた。ヨーロッパ諸国は、非ヨーロッパ世界における権力政治と国

0年前に遡るのである。

いちばん極端なイスラム国は、シリア・イラク両国の領土にまたがるシャーム砂漠に支配権を確立した。シリア内戦の中にさらに内戦が入れ子になっていく二重戦争の複雑さが、イラクや他の中東にも広がっているのだ。

他方、独立主権国家ウクライナの一体性を脅かしクリミアを統合したロシアの動向は、東ウクライナでの内戦をもたらした。米欧とロシアとの緊張は、国際政治の中心的争点になっていく。これも遠因としては、第一次世界大戦とロシア革命に遡るといえよう。

(やまうち まさゆき)

この大戦は、近代のどの事件よりも歴史の道筋や人びとの運命を大きく変えた戦争であり、その性格を考えることは、100年たった21世紀の現在も、人類の近未来を理解する上で大きな手掛かりになるといえる。

この点こそ、昨年11月に出した小著『中東国際関係史研究』(岩波書店)のモチーフなのであった。

第一次大戦が現代に投げかける教訓について、外務省の要請でこのほど出かけるアラブ首長国連邦、オマーン、ヨルダン、エジプトの講演でも、私なりに考えを示したいと思っている。